

倭訓栞中編

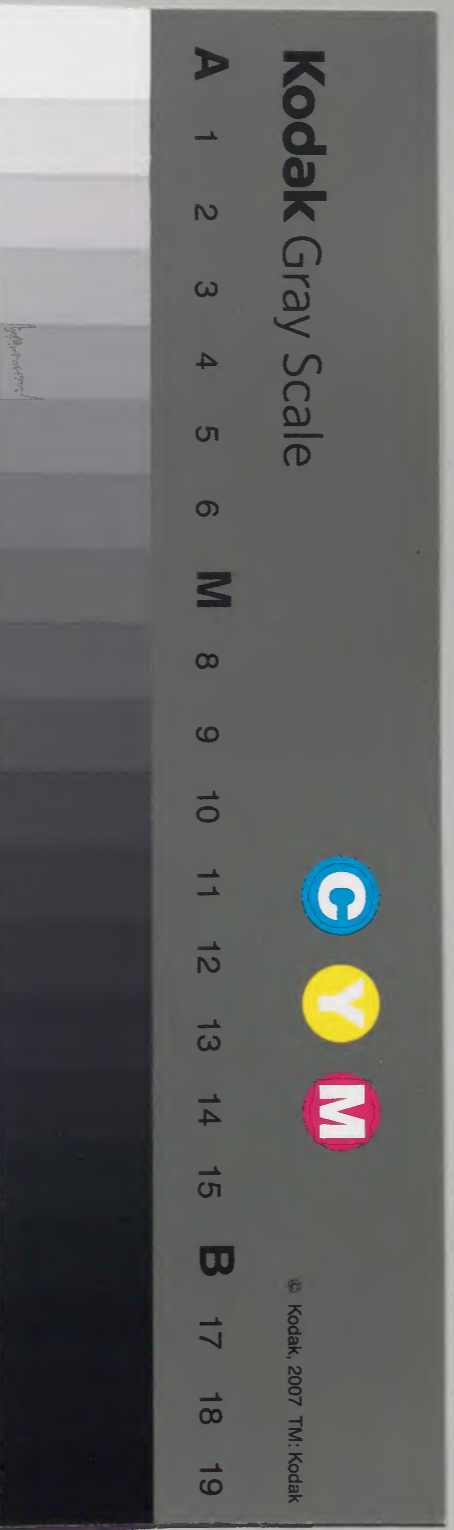
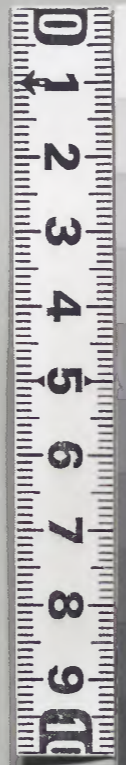
由也部部

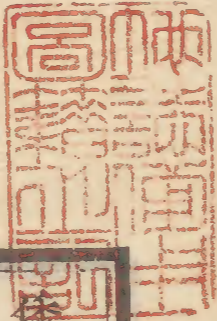
二十七

					和書門類
			三六七二三號		
		一三三函			
	二架				
六册					

庫文閣内					和書類
			三六七二三號		
		六四册			
	三三函				

内閣文庫	
番號	和 36723
册數	64 (61)
函號	263 7





倭訓栞中編卷之二十七

洞津 谷川士清纂

也の部

やいど 火痴とりみ 和名抄し串字はとりみ 魚肉は焼の籤あり又と

らとりの條考ありとる 東鑑し焼狩停止之とるあり

やいど 今田間鹿と怖なり竹し鹿の油と煤し和してあり

つる立置とのとりみ焼炭の義ありとる 後漢順帝紀し初聽中宮得以養子為後世襲

封爵とる ○神代紀し取而子養焉ひたりたまふとる

○東鑑し妻美子事九女人者无自専法養子者夫不免之 外女人美子所不免也とる

やうす

様子あり宋朝の俗語ありと云う

やうど

揚枝の字梵書より今唐山にて齒托と云う○齒

刷ハ齒と掃除する具あり象牙にて造る先ハ刷毛あり○大嘗  
會紀ハ鉄揚枝あり江次第ハ刀子と云う物あり

やうきう

揚子と云うけり唐玄宗の貴妃と相共く弄ハキリ物

とてゆへ未央宮の揚柳と伐くやと云う太液池の芙蓉と矢  
と云うけり始り揚子射禮と云う

やうらん

玉燭寶典ハ羊肝餅あり今此製と此ハ据あり

ハ豆沙糕也と云う或ハ羊羹と云うけり○求肥銘ハ唐山

とて明糖と云ふ

やうで

平家物語ハ腰よりやうでと云う拔出と云う鳴りて

と云うハ横笛の音轉對馬音あり中山大納言記ハと云う或ハ  
やうと云うハ陽声の音笛の異名あり陽声調ハ横鐘管ハと  
て冬至の氣候ふとて陽氣の動くはめて名と得るものと云う

やうらん

養老の瀧と美濃堂 郡多度山あり元正帝の

時醴泉出たり行幸ありき符瑞昏ハ醴泉者ハ美泉可以

養老益水精也と云うけり元正改ハ養老と云う

今瀧とハ一町と云う瀧あり清水あり兼ありと云う三伏も其

冷多くハ是醴泉の趾ありと云う二年立春曉挹醴泉

於京師為醴酒と云ふ

やうとやう

養生也但馬ハやうと云うけり

やうら

璿瑤と云うけり西域記ハ在頭曰璿在身曰瑤と云ふ

やうたい

様鉢と云うけり容鉢と云う

やうづ

影向の音あり

やうづ

東南風ハと云うけり山路の物ありと云う東國と云う

此風ハと云うけり南來の音と云う

やうせん

永宣音と云う

△やう

日本紀ハ家部と云う和名抄ハ宅部と云う

より

やぢう 箭筈はより大夢行義補一矢幹と云より  
 和名抄一幹はより(古語一ぢうやう一ぢう氏ぢう  
 家の義ありと云り又親属はよみたるを生ぢう弥ぢう  
 の義とや○やぢうのみと称するハ帛は幹とてわらぬ皺紋と成  
 ぬより○魚よりハ筈に似たる故あり色赤とありて其形状  
 うさきのとく細長くて背長く三分の一居く尾より一  
 線ありて長くひたり彙苑詳注よりハ戴帽魚ありと云り  
 ○虫よりハ金魚槽中より生々○肉よりハ三稜はより○  
 相撲のよより

やうまー 俗一喧擾の意より漢書師古注一朝鮮之間  
 謂小兒泣不止名為喧と云りあかき一の急語あり一又や  
 ハ弥の義あり

やうたふ糸 樓船あり東鑑一屋形船と云けり兼好集より

折句

やう人のとらぬ終たるくくくある少えの糸と云くゆれ  
 △やまば 化人場はより焼尸場も同一○刀よりハ焼又之  
 やまぶぐ 焦墨はより臭披の本紙用  
 やまが糸 焼金あり科人の額一焼金ありつる貞永式目一  
 庭訓一火印と云より黥と額一入墨すくると云り  
 やまや戸 紀伊備前一あり○やま山石ハ伎術より出  
 やまもち 庭訓往来一焼餅と云り或ハうけくくくらとよ  
 せり

やまゆい 焼飯あり宋元通鑑一火飯と云る焼飯の字歳  
 華紀麗一と云

やまゑらのひが 和名抄一東宮舊事の炙函はより  
 やまこえ 和名抄一糯米はより蜻蛉日記一やいごらと云  
 するより後嵯我帝龍潜の時ハ翔一進うより嘉瑞と

一毎歳必ず所せりし事公事根源一云云あり ○津輕  
豊前薩摩一むくく免越前一ソリコ加賀一秋ハソリの口  
とソリ ○節料の焼米とソリ東鑑一云云あり

やきほら 金銀の器物一ソリ 鈔紙一ソリ  
やきでのり 鴨長明一伊勢記一云云度會郡通村の内  
一ソリ 神領記一焼出御厨塩九斗とあり 又伊勢國一志

郡藤方村の東の田地の字一存せり 夫木集一  
伊勢の海一浦風一云云 若や河海一云云 後集一云云

今杉方村一焼塩賣一ハ此一云云あり

△やくとん 朝野群載一正曆五年六月被安置疫神於  
船岡山長保三年五月被安置疫神於紫野京師衆庶行

所あり一云云 疫神一云云 祀一云云 其本文一  
云云 秋曰神有所歸乃不為癘也一云云あり

やくとん 王命論一罹厄會一云云 轉訛一云云あり

やくとん 役介一云云あり

やくとん 寺院一云云あり 職役人あり ○戯劇  
家一云云あり 優人あり

やくとん 薬師寺一云云あり ○姓一云云 太平記一云云あり  
役送一云云あり 建武年中行事一云云あり

やくとん 漢高紀の注一云云 約謂言契也 字彙一云云 以言許人曰  
諾一云云あり

やくとん 施薬院一云云あり 拾芥抄一云云 施薬院ハ養病  
人所也一云云 今の施薬院ハ丹波家の裔あり

やくとん 字書一云云 言語戒令檢束皆曰約束也  
やくとん 薬罐の音あり一云云 湯罐と云云あり 隠元やくとん

んふともソリ 遠州一湯瓶信濃一云云 手一云云 湯瓶ハ大双紙  
一云云あり

やくらうひ 枕草紙に盃けりたる事ありたり倭名抄に錦貝  
 夜久乃班貝西海有夜久鳩彼島所出也とありたり掖久の事  
 ハ推古紀に始りたりとありたり琉球の内の島に其貝と盃ありたりハ  
 北山抄賀茂臨時の祭の條に螺盃とありたり宋史日本國傳に  
 螺杯二口とありたり西京雜記に香螺厄出南海とありたり物あり  
 たり又綾とやく貝あり磨く事桃花葉葉ふありたり衣  
 服の地と瑩く事とやくとありたりとありたりとありたりとありたり  
 とありたり今夜光とありたり琉球にありたり貝ありたり夜光ハ夜句と  
 ありたりとありたり

やくらうひ 藥師草の義鷹詞に青藥とありたり定家卿の鷹

やくらうひ 醫師ハありたり藥袋ありたりハ人医療す人ありたりとありたり

やくらうひ 假し所詮ありたり事ハありたりとありたり○氏姓に藥袋とありたり訓せ  
 り無名の義ありたり○戴恩記にそハ利根者ありたりとありたりハ方葉

やくらうひ 語ありたりとの代りありたりとありたり詞とありたり○南  
 部に義ありたりとありたり

△やけび 火傷に云焼處の義ありたり

やけん 藥研の音ありたりとありたり○やけんとありたりとありたり

茶經にありたりとありたり

やけり 焼原あり焼痕とありたり○やけのハ焼野也辨慶と色

黒ありたりとやけのありたりとありたり譬へたり事盛衰記にありたり

△やご 田舎にて傍藥にありたり弥子の義ありたりハ木綿ふとん

とありたりとありたり

やごせ 伊勢三郎と妻とありたりとありたりとありたりとありたりとありたり

とありたりとありたりとありたりとありたりとありたりとありたり

やごつたご 宇治拾遺にありたりとありたりとありたりとありたりとありたり

△やけき 日本紀に鐵とありたりとありたりとありたりとありたりとありたり

とありたりとありたりとありたりとありたりとありたりとありたり

やらり 箭眼也○鉄炮さすハ銃眼あり

やさげび 矢叫の義射とききの矢声あり夫木集り

道遠き那須の湯宿の夫さげひくのゆめ鹿のちろそまゆゆ

△やーや 梵書く夜叉とスル此云苦活とソラ○源義朝美

濃青墓の驛長大炊家小宿一其女延壽と廢一女以生是

と夜叉と名く

やーむ 新撰字鏡く傲とソラソラヤーむの略

やぶら 和名抄く鏝の俗名とソラ夫尻は根とソラ西土

の書く足とソラ如く蝦夷の夫尻ハ鹿骨と用くと魏志和入

傳少と或ハ鉄鏝或ハ骨鏝とスル

やーらじ 中臣被詞く八塩道とソラけりハを弥て言あり○一

説く月の出ーかの入を南く巡り北く中と是四方也晝夜兩

度あるハ四道あり指と引と一道とソラあまハ八塩道とソラあり

やぶらき 類書纂要く鑽倉とスル家後代の義

やーき 屋敷の義あり茅宅とソラ○武用辨畧く堀屏

櫓ふきハ屋敷構とソラとスル

やーら 西州の方言社蛇の義あり黄領蛇也とソラ本州

り多在人家屋間吞鼠子雀雛とスル近江く里まり津

國く移りてソラ

△やーら 倭名抄く鑿と訓あり矢磨の義あり豎横く目と

とソラあり夫ハ其形の似るハソラ之錫ハ横くぞら目とき

またるなり新撰字鏡く錯とソラ鍍と同一又鍵とソラ

○弓小とソラ矢摺の義あり

やーら 今宮祭のやーら花とソラ百練抄く久壽元年

四月近日京中の児女備風流調鼓笛參紫野社世号之夜須礼

有勅禁止とスルやーらとスル意とソラ四季物語くスル

了鎮花祭の義く同一寂蓮自筆の哥今宮神家く有初め

くやーらとソラやーらとスル又長和五年三月始

て高雄山神護寺少く法華會と行ゆる俗にこれをもやすとい  
花とよみの縁起し紫野に人多く集りて法華會やす  
らけりてそよとよみのきとつてやたれとてくくす  
西行

高雄山にありてはとよみ花とほりてはあり

やとくし 中臣校に安國とさるるにそよとよみ又日本の  
事よりて浦安國と畧すあり

やとくしや 亞細亞洲也渾地五大洲の二界日本唐土天竺韓朝

等ハ此例に屬し

△やとくし 俗に瘦とよみと反すあり

△やとくし 祝詞に八十綱とくろの長きゆとあり

やとくしのき 日本紀の哥にそよ前杓校の木とて今も大菩薩漢

名鬼前ありとのよ

やとくし 佛足跡の哥にそよ八十種好あり心地觀經ハ

八十

やとくし 龜兆傳に吾八十骨甲也乾曝日以芥天之千別千

別甲上甲尻真澄鏡取作之とあり

やとくし 日本紀に八十梟師とあり

やとくし 新六帖にそよの氏族志の類にあり

やとくし 八十の千節とて八十の竹の教多きとあり

やとくし 鎌倉右大臣集に

あふみのあはれとそよとやとくしにあり

やとくし 八十湊あり近江にあり万葉集にあり

みまはるやとくし又近江の海にありとあり

やとくし 析事祭祝詞に遠國ハ八十綱あり

引あするそよとありとあり

やとくし 追く貢奉りてあり

神代紀に八十玉籤とあり賢木野薦



ふくはつて玉ハを免たる河なり

やそのちまき

八十衢也萬葉集より

やそのふたつ

八十の舟はあり天河より

△やたね

矢種の義矢種もはきあてよま矢とすつと種もな

きく弔古戦場文久夫竭分弦絶とていふなり古ハ弓矢といふ

幾しゆんくくく事保元平治物語より

やそびおがみ

古事記より八度拜とて由数拜は重みたると云

とつりけきと兩段再拜は兩度よりなり

やたねごち

弥猛心の義俗より受けくものなり物乃

あゝ属けよとるハ矢長の意は兼より八十梟師の義とは

非あり

やはが

矢壺の義おのり矢つがめなり

やひ

矢筒の義西土にて箭筒といふの類あり

やはさ

器よりハ薬器とけり○口語よりハ奴氣と云

やはら

をづらとて高きをいふなりやはらとて鳴鳴と云

えんち

やはら

奴腹の義殿腹よりむくなり河あり

やつあが

八藤の義綾の紋より此藤の丸は蔓なり

極くみく河あり

やつうのき

伊勢天照大神宮祢宜圖帳より天香山立流

やつうひげ

古事記より八拳鬚より作日本紀より八握後

髯より作らた成長の体よりひの辞あり

やつこ

水はせきとてく左右の田へみ引板より往來の

たりく左右より四つて橋はよりて伊勢物語より水堀川

の蜘蛛もあした橋はハ渡すといふ今藤より浦より朝

子より間より十二橋よりあり

やつこ

窠はよりりやはらとて意あり

やつのまがうつら 日本紀ハ省はたたり

△やとの 太平記ハ多やハ味あうとのハ殿あり

やとつま 石見國高角より西二里の里ハ人丸の社

人丸の塚とてありて農家の内ハやとつまと稱する者是と

往古より司る塚とてまう家の此まはりて近羊石棺ハ

掘見せしとてい傳ハやとつまとて奉々人の謂あり

△やふう 出羽の佐屋襲ハよとてんハり○家中の義ハ

いり

やふきらび 柳さびのまは社人如木雜色等のきりま

鳥帽子ハり堂上のまはりハりハりハり

やふきじり 群芳譜ハ細腰娥媚者謂之柳腰とてん

ハり俗ハ女三の宮のまはりハりハりハり

やふたのまは 白樂天ハ詩ハ榆葉拋錢柳展眉とてん

又芙蓉如面柳如眉とてんハり

やふくはくらふ 箭列繕修の義あり實朝公

このふのやふくはくらふこのふハハりまたりハりま

△やのたあ 箭竹ハハのま箴ハ白眉竹ともんハり石見

ハり島のり箭箴竹のま生ハり新六帖ハ

このふの負てふのたむまもあはすハりぬ我んか

やのへれこけ 和名抄ハ屋遊ハり屋上苔あり

△やとぎ 矢人あり日本紀ハ矢作矢部ありハり矢ハ

ハりハりハりハりハりハりハりハりハりハりハり

此故多ハ存せり蝦夷の矢ハ亦同ハ唐太宗ハ四羽の矢ハ

好ありとてハりハりハりハりハりハりハりハりハり

ハり夫木集ハ

軍ハり矢化浦のハりハりハりハりハりハりハりハり

説苑ハ臨難而鑄兵ハり是あり○徒然草ハ太力ハりハり

るけしちるは弓矢矢うける矢ふの矢と兒川を參明の橋  
の北に竹林ありやしきの長者の家趾ととる

やむいし 近江湖の邊あり矢橋とけり伊勢河曲郡  
にもあり村名と式に矢持神社とてくま是あり椅の字  
春の義に河守義とて訓せしやむいし遣橋の義ありて  
赤橋あり○大矢橋を常陸にあり佐竹義政は斬  
るあり

やうくくぐい 和國の文字に就くよあり

やうくくくひうり 和光の義あり老子に歩く神柢の奇  
多くよあり

△やぶみ 矢文の義通鑑に射書にる

やぶみ 矢袋とけり矢矢あり袋障子のぬくす意  
和名抄に射矢矢あり今揚子に之の

やぶみ 官者の宿降する矢云敷入の義あり敷込の故

やぶり 里に帰る意あり○正月十六日のやぶりハ五雜俎に齊

魯人多以正月十六日遊寺觀謂之走百病又放夜とるあり  
琉球にてハ此日男婦但拜墓と中山録にるあり金國の  
俗ハ正月十六日縱盜一日以為戲妻女寶貨車馬為人所  
竊皆不加刑と宋小説にるあり妻女とるハ大原のざこ  
海に似たり

やぶくろ 藁にありり箭囊の義あり

やぶあし 通晴とる敷脱の義ありやぶハ在用のを云

やぶくろ 斜眼とる

やぶくろ 太平記に独笑して敷に駒に居たりと

やぶくろ 野夫に功の者ありとの義あり

訓抄に敷にたけのものとるあり尾州河波手の森乃  
近色一竹林の内、茅舎に多くるの扱製す是ハ二月

の上の寅の日勢田の社に献すやうきやうきと云ふ

△やへまの 禁野に八重づく羽のまうたる雉ありしやうきと云ふ

と云ふ

やへんくえ 八重廿重の義あり

△やまへ 神代紀に八百重と云ふあり

やぶの 矢保侶義紗に云く造る物ありしやうきと云ふ東山

殿の対より始ると云ふ

やふち 夜護と云ふ和名抄に待夜而登其遙奔者と

云ふと云ふ

△やぶが 山縣の畧ありし西土も山縣村縣ありと云ふ

又和名抄に山部と悉く山家と云ふ此文字に於て

喙にや○山鹿城に筑前遠賀郡にあり平宗盛の安徳

帝に奉りて遷りてあり

やまゝふ 山階寺に奥福寺あり光明皇后の佛足跡と云

らけにあり今に薬師寺にありけの佛足跡の奇なり久須理師波都祢乃母阿礼等麻良比止乃伊麻乃久須理師多布止可理家利

やまてい 禁秘抄に東寺一長者多候夜居又山寺各一人必可候と云ふ山に山門延曆寺に三井寺あり

山法師寺法師の称に同し○ては濁りしは山中の諸寺之

やぶぎハ 万葉集に山際と云ふふにあり又やまの

えとも点とれは同義あり

やまゝとら 山守あり日本紀萬葉集に云ふ

やまゝり 麓に云ふ山本の義中臣板詞も高山の末短山の

まゝり末に巔末の義山上にあり

やぶびえ 山姫の義山彦に對して云ふ

やまゝとら 山國に丹波にあり光嚴院庵に結んで居るふ

て崩ゆありと云ふ

やまのりき 山城のし訓郡山崎ハむら河湯と云ハ差城天皇  
 御製の詩凌雲集ハ云ハむら河湯の祠のあり所むら河の離宮  
 ありむら河湯橋ハ水無瀬のむら河の橋ハ○関戸の院  
 山崎の関戸町ハあり拾遺集ハ云ハ○山崎宗鑑ハ常德  
 院將軍義尚公の童あり○徳玄のほろれありて傳ハ此山  
 あり家ハ火災ハ免ハ云ハ云ハ

やまのりせ 山と狹あり野も庭とせし同

やまのりく 和名抄ハ云ハ山直山とありたハ河と云ハの畧あり

和泉和名郡山直神社あり内畑村山直記の東あり

やまのりど 山窓ハ云ハ山崎の窓ハ似云ハ云ハ

やまのりふ 山城守治郡山科神社二座式ハ云ハ○山科陵ハ

天智天皇也御陵野ハあり○山科離宮の蹟ハ大宅村ハ

あり○伊勢談ハ云ハ山科の禪師の侍子ハ人康親王あり

四宮村ハ山莊の蹟あり又招月菴の蹟もあり○鴨長明

菴跡ハ日野村の東外山の傍ハあり

やまのりけ 山陰山ハ定家々の奇ハ云ハ

りくの巻ハ云ハ月との巻と云ハ本末ハ云ハ云ハ

晋王子献ハ故云ハ云ハ云ハ

やまのりぐん 大和笛あり御神樂ハ用ハ云ハ云ハ物足あり

やまのりろ 山家風ハ云ハ云ハ葉集ハ云ハ古今集ハ云ハ

海ハの風も云ハ云ハ云ハ云ハ

やまのりぐみ 参詣記ハ神路川の山ハ云ハ鏡の云ハ云ハ

の影ハ云ハ石あり是ハ山鏡と名ク云ハ云ハ今ハ鏡石と云ハ

やまのりさ 獣ハ斬云ハの刀あり伊豫ハ云ハ云ハ云ハ

云ハ云ハ云ハ云ハ

やまのりひと 土佐日記ハ病者ハ云ハ云ハ云ハ云ハ

やまのりふ 山の横道あり云ハ云ハ

やまのりこ 新撰字鏡ハ云ハ云ハ云ハ云ハ越の義ハ

ふと

やまのみち

東山道は日本紀北山抄より今中山道と

ふ

やまのそで

山あひの袖とも山のかさありたる也

やまのけり

山神はあまあり

やまのつら

鷹より又撫鷹山鶴あけり山を毛はつり

ふる鷹あり山よりよめとてうららとてろろとてうららとて

うららとてうららとて又妻のゆらたはけり姫うらら山つらと

りふとを

やまのぢとび

山里ありたるありがう及ひあり

やまのうら

山内氏佐々木信詮の裔

やまのこころ

源氏より又奇はりてうら

やまぶとこころ

うらを相後源氏物語より又山懐の義山中

のこりりたるまはりて

やまのたをり

万葉集より又山の手折るうらめき所とて

ちり

やまのこころ

天皇はちなるあり

やまのつら

山偏着の義とて也

暮らみ山つらとてうらたの羽る鷹は合せはらうら

やまのちみき

うらを相後より山の王よりせしむると又山の手

はらうらありせしは施の義喰はまらむらうら

やまのつら

万葉集より又山の手より復あり

やまのけり

山あり出の字の義唐詩より山上右山不得帰とてうら

やまのこころ

山路は行衣之

岐ありとてうら

神代紀より八岐大蛇とてうら頭尾ハ

△やみぢ

闇夜のゆと後世のやみはもろり冥塗とて

うら

やみ縁 止字はよりのみ縁及びあり

やみのトキ 闇の錦あり朱買臣の故事夜の錦とよくと

やむや 出雲の名塩治はよりの神名式に塩治神名と

と由風土記に夜半夜に似る日本紀に止屋洞とありと同  
変ふれしやむやあり後世此をよりの出する人よんや判官  
と喩ハ訛あり

やむごふた 元止期の義ありとよ

やむくろ 新撰字鏡に驥はよりの病の意とる

△やとちり 俗語あり山中の里はよりの山のちの義後の及とて

ちハうしハ略す例あり

やとめたふ 農具にソノ三セ圖會の柂杷也とよ又後

家だふいとよ元禄中よ和泉高石の人始て造るしソノ  
稻こきあり往昔ハと記著とソノ一とよのて稻こきをた

一後世此器出く孺の取業は失ひたるとはひて名は得あり  
とて

△やとちり 差頃之はよりの韻會に差ハ較也とよと

△やとひすごとり 時鳥の事ありとよ

五月雨の雪雪とてさめありちりをせうかの三月すこる

△やらで 不遣の義あり

△やりた 箭よりの遣羽の義あり又風きりの羽とあり乃

ねあり

やりみづ 遣水の義庭にせき入く流しやち意之今海と

ソ

やりふハ 遣繩の義之繩は投やるとよ

やまたつら 木居ある鷹の下よソノ鳥はひたつらと

公家の河あり武家たやきたつらとソノと

やアこぶまぬ 鎗は多く集めたり余障子の如くある

やアとくぐら  
△やろつとあき  
車一とろ 軾出はとろ  
無遣方の義あり

和訓栞中編卷之二十七

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

倭訓栞中編卷之二十七

洞津 谷川士清纂

由の部

由らさ 湯浅とちり 紀伊國一りり ○湯浅定佛ハ元弘の

亂東軍の将より

△申うまゝ 遊女の音あり 和名抄曲調類一遊宇女とんた

と河義あり

申うまゝ 有福とちり

△申うく 船一入ら 水以汲棄るはとろ

ゆん 着葉集一将去はとろ ○和名抄一檣扱と訓

せり漢語抄一は 柚柑とん 今由つととろ

おつとけ 和名抄一何人呼大桶とん 今も何し酒戸

の大桶はら 和名抄一明衣はとろ 浣衣あり 今ゆこと

おつとびり

和名抄一明衣はとろ 浣衣あり 今ゆこと



ソハ梵書ソハ內衣と因

おう狐あし

小鳥のすまひ美濃の頓宮ソハ床狐な

ソハ焚きこふかきりゆきソハ何とゆりソハ良基公

志ろけりきあふ山のけきそもゆり狐あしん焚きゆりソハ

神代狐あしけきあふ山のとけきそもゆり狐あしん焚きゆりソハ

多り神代巻ソハ同床共殿とんソハ

△ゆきソハ 往来ソハ明日香河の迹曲の五万葉集ソハ

葛市郡岡飛鳥二村の者ソハ

ゆきあし

亡鬼の人狐あしソハ俗語あり剪燈新語ソハ喬生

婦女携手雲陰貴月黒霄往々出逢之者得重病ソハ類

あり

ゆきさすり 行摩の義ゆきさすりの袖あしソハ○ゆきさすりの

鷹ソハソハ尾羽も雪ソハすりゆきソハゆきソハ速物のことあり

ソハの雪ソハ白く雪のゆきゆりたるソハ云とんソハ

ゆきソハ 馬の腹帯ソハゆきソハゆきソハ義之壽永の元信記

ソハ鞆鞆とんソハ鞆ハ意狐もて製サる字なるソハ

ゆきソハ 往来の道ありゆきソハ

ゆきソハ 伊勢物語ソハ古詩ソハ行々重行ソハ

ト

ゆきソハ 躬恒集源氏あしソハ行々義あり

ゆきソハ 行遣ソハゆきソハゆきソハ

ゆきソハ 雪足月の義十一月ソハ

ゆきソハ 徒然草ソハ無門関ソハ雪佛滿掌握雪撃

ゆきソハ 雪布袋雪達磨あしソハ

ゆきソハ 佛足跡の奇ソハ西域記ソハ西天随所宗ソハ

後皆須旋繞盖帰敬之至也

ゆきソハ 雪齋の義橘諸兄公の糞束の紋ありソハ

由

由きのみみり 萬葉集 往反道とまり びり 及びふまきとつ  
反き往來の返あり貫之のあしあきつひともなり

由きくはく 源氏蜻蛉日記 入るるり びり 白きか

由きはるる 源氏 白雲孤博 又宮河をひともなり

由きけのさハ 雪消澤あり春日神社の神楽所の南

堀川院百首

春日の言けの涙と袖ぬれ君の落しと小芥とそつむ

ゆきのさくはき 雪中 竹木折る

ゆきのたふみづ 雪の玉水あり新古今集 又雪消て蒼小

落る滴とつり

ゆきかたそく 白髪 の体は

ゆきとれのあそ 松竹の葉ぐせぬ 新古今集

ゆきとれのそく 雪とく 臨く 空あり

ゆきとろのたろ 鷹の腹背 白き狐 白きとつひ

て白き狐 雪白とつひ

ゆきのこやまふあくとり 玉葉集 又雪山 寒苦鳥

ありて先帝の身は 観せし 温槃 經 又

△由ぐ 湯具ありよてゆり 湯とつひ

襦ハ陰交し 小衣あり 湯とつひ 湯とつひ

短き狐 犢鼻 褌

ゆくハ 儀式帳 湯 湯とつひ 湯とつひ

とつろつろ 今内 山 雑例集 御田 種時

耕作也 又 外宮 伊賀利 神

字 鏡 的 狐 湯とつひ 湯とつひ

ゆくら 西土 湯口 湯とつひ 湯とつひ

ゆくら

ゆくはき 神代紀以後又以注記より或は向後記よむ音

ゆくはき 若葉集一行方来方とる由様と方とは通へ

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

あり六花集 一のゆげゆげとの教ひひつら八みき九ッあう十六

雑考の奇

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

△ゆくはき 湯折より源氏より一のゆげとてその教多き譬

ゆつぎ 湯罐ありけさハ次の義相次く注ぐ意ありア  
けきあくりと同一或ハ坏の義とするハ何れハ湯桶と云ハ也

ゆづ 粥ハよりハ子柄の義あり和名抄ハゆづつハより

ゆけろふ 新撰字鏡ハ銷ハより消ハ同一

ゆげろけろ 俗語あり譲ハのけろの義ハの及ろ

△ゆむり 尿ハ訓ハゆまろともて湯ハなる此義くそまると

同義ありハ○ゆむりのありハ瀧白塗あり瀧音尿也おほろ  
の母ハできハ○西土ハ始ハ如女子小解様と云ハハ我

邦ハ同一ハきありハ越後の鄙俗男子のぬ  
ち場殿ハ日本紀ハ射殿とゆむむのハとハなり

拾芥抄ハ武徳殿也とハなり○ゆむ始ハ十月五日のハなり

あえんく 古事談ハ浪ゆハりきてとハなり

△ゆびく 札記ハ濡ハゆハみ又燗ハゆハり湯ハと引ハり論ハ

燗ハも同一童蒙頌韻ハ脛ハゆハり○ゆびきハのハ茹ハゆハ

ゆひすん 和名抄ハ指環ハより環ハたハきハよりハなり

ゆびきり 唐史ハ南霁雲拔佩刀断指誓ハとハなり

ゆひめさむ 祝詞ハ荷緒縛ハ堅ハとハなり

△ゆふひ 西史記ハ指掛ハとハなり  
郡ハ紫合ハとハなり里ハあり

ゆみき 結城ハよりハゆハる木綿の義穀木所生故謂之  
結城郡とハなり下総國あり○結城宗廣ハ南朝の忠肝の將

委川集 中 終卷之二十七

光ハ頼朝義起の時乃忠臣小山朝政の弟之其子細戸十郎朝村  
將軍頼經ノ後ノ京ノを去リ時関白の算ニて籠鳥の中ニ入  
リハ籠箭ハ削虚ニて樹ノ下ニ射テハ鳥射ナリト鳥籠中ニ入  
テ傷ミテ東鑿ニ入ルルヲ○結城氏ハ秀郷ノ男鎮守府  
將軍千峯ノ六世

由ぶ縁 和名抄ニ浴斛ハヨリ今ニヨリ○江戸ニ舟

一ノ浴室ハ人ハ浴セシムル船ニヨリ

申ふその 唯夕の園ハワケヤ又近江ノ在トモ

申入ヤ 夕園の義俗ニヨリヒヤニあり

申入ヨリ 新撰字鏡ニ晡ハヨリ夕ノ義ニタリト

云義志あ反さニヨリ申入ヨリトモ

申入ケ 夕影の義夕陽ハヨリ菅家著葉ノ暮景ト見

申○申入ケ山ノ名所ニあり

申入グキ 夕暮ハ殊ニ秋ノ賞ニハ相マノキハヨリ

てあしニ夕の称ハヨリ寂蓮西行定家ト次弟ナリト

申入むん 夕映の義夕ノ物ノ色トありハヨリ西土ト映

日トヨリ

申入ふぎ 夕ノ浪風ノわきたるハヨリ

申入ぎぬ 木綿ノ寸緒あり

申入おふ 雲ニハ横ありトヨリ夕集ヲ義

申入がみ 木綿髪ノ義馬ノ毛色あり躬恒集

枕ニ布ノ寸緒ニハヨリ毛ノ色トあり尾ノ色トあり

クニトヨリ

申入けり 神代紀ノ作木綿者ハヨリ神樂奇ノ木綿作信

濃原トヨリ

申入だき 万葉集ノ木綿牒トヨリ木綿蚕ノ夢ヨリ云

ありトヨリ向ノ山又手ノ取指又曰上山トヨリ田上トヨリ

上の義あり

申すまふれ 夕暮暮あり夕暮一回  
 申すとつり 夕鳥狩の義なる指しむるもつり  
 申さうらぎ 夕し其処は去る義あり蛙あつたり  
 申すまふひ 夕轉とちり今俗よびまふひするこが里人  
 申すきびひひ 小山朝光少年有艶色右大将薨之時入戀之  
 有可草其貌之命而頼頼設左右角而滋艶容也入効之号結  
 城額鎌倉私記より申  
 申すれあひ 夕暮紅つひけちちあり○修朝堂より夕  
 紅つひまきそのつりのうらむあつらうらむあひのて  
 申したつらき 夕し立雲の義之○奥義抄より申すつら波の名  
 あつらうらぎ 夕つら波の義の響き跡鴛鴦指之  
 申すつらうらぎ 夕玉葉の義竹の露ありと藏玉葉より申す

ゆみぐりのくも 冬の山よりわたり霞の凝堅まわらうらぎ

ゆみぐり 〇雲のゆみぐりのゆみぐりの志をあらわすあり

申すまふけり 六月校詞より日之降より由四時祭式より晦日申  
 意ありゆみぐり夕暮の義あり

申すひのくざら 六月校詞より日之降より由四時祭式より晦日申  
 時とあり

△ゆまよりり 祝詞式より持由麻波利より持齋波利よりけり持齋

よりゆみぐりやむむ及ゆみぐりの波利及ひあり

△ゆみぐり 新撰字鏡より拾遺より日本紀より彈弓弦とゆ

みづらちすくすくあり

ゆみぐり 為葉集より弓雄より申す射人あり

ゆみぐり 弓張用あり上弦下弦はまはるる詩の注に

八九日月体半昏而似弓張而弦直謂之上弦釈名も若張弓  
 弦也と云ふより日本紀より弦はゆるりとあり新撰古今

集りて弓張の半人の身もふりたり

ゆみやまらまら 弓矢八幡の義八幡神は号矢神と称する故

ありて天神を三女神と本きて應神天皇を因り同徳たり

まらまら

△ゆえにの 夢殿あり聖徳太子の故事より大和法隆寺の

内へ遺蹟あり上宮王院と号す

ゆえにの 夢觀鳥あり蝶の異名とあり莊子へ本つきた

るなり

ゆめゆめ 故事より仁徳紀より出く菟餓野ありは後野

とよゆとては拾津風土記より安徳帝の時安徳一と新殿と

造り法皇公居志免るるなり夫木集り

己の身にまゐる並まふなり心ほそけく鹿の鳴るなり

△ゆらり 徒然草よりその事より志きてゆらゆらとありは

くととらゆらゆらあり

△ゆらゆら 抄にたる意よりゆらゆらとてしる轉せる酒茶一

△ゆらゆら 世より云百合若ハ豊後國船居一塚あり揚宗和尚

の討りの塚と名く石棺の内白骨一具あり又古刀一柄朽残り

一は元のぬく埋めて祀まり好臣別府太良同次郎の塚ハ別

府村にあり百合若の愛せり鷹も線丸とありゆらゆら古

記宝録あり妙義山に百合若の故事は語りはるなり

ゆらゆら 緩き意之召人が赦免せらるるなり

△ゆらゆら 遺物の音轉るとあり(遺言も同)

△ゆらゆら 源氏より石故者の義本へ似合へけりあるなり

ととら





